

電子看板の活用報告

観光、災害情報など事例

京都府と京都スマートフォンシティ推進協議会は4日、「京都ビッグデータ活用プラットフォーム」の第3回会議を京都市上京区のホテルで開いた。ビッグデータを収集する電子看板「デジタルサイネージ」を使ったサービス事例など複数の具体事例が披露された。

同会議は、昨年11月に立ち上がった。地元企業をはじめ、大手携帯電話会社などが参加する取り組みで、ビッグデータを観光産業などに活用する具体的な方法を探って

いる。

会議では、伊藤忠テクノソリューションズの担当者が、外国語対応可能なタッチパネル式の「デジタルサイネージ」を利用したサービスを紹介。交通機関や飲食店、文化遺産との連携で情報発信

する事例や災害時に情報掲示板として活用する取り組みが報告された。

晶和クリエイション(南区)は、公園のスマート化について報告した。公園に無線LANセンサーやネットワークカメラが付いた街灯を導入。通行量が減る時間帯は調光して照度を落として管理しやすくしたり、人の流れを分析したりする事例を解説した。今後、同会議は分科

会などで本格的にビッグデータ活用の研究に乗り出す。

(仲屋聡)



'19.3.05